

琉球舞踊の指導方法についての研究報告

— non Okinawanへの指導方法 —

孤島 丘奈

はじめに

本稿は、2006年2月中旬～8月中旬の半年間、国際交流人材育成財団派遣留學生として「non-Okinawanへの琉球舞踊の指導方法」についての研究をまとめたものである。

研究の場として、2006年2月～4月は米国フィラデルフィアのThe University of Artsのダンス学部で、gest facultyとして琉球舞踊の指導(授業形式でのワークショップ、及び学生発表会の場である「Spring Dance」コンサートでの演舞指導)をした。また、大学内の各授業に参加し、講師がどのように、学生に指導しているかも勉強させていただいた。

2006年5月～7月は現地の県系2・3世に、琉球舞踊を個人指導し、その成果発表の場としてプライベートコンサートを企画・上演した。

様々な背景を持つ人達に、違ったスタイル(ワークショップ・舞台公演に向けての多人数への指導・個人指導)での指導方法を研究できたことは、私にとって大きな財産となった。以下、半年間の研究の成果をまとめる。

1、大学におけるダンス教育：UARTSの場合

The University of Arts (以下、UARTS) はフィラデルフィアの中心部にあり、関連施設は大通り沿いに点在している。大学専用劇場が計3ヶ所(小ホール・中ホール・大ホール)、スタジオ棟、講義室棟など、充実した環境が整っている。

ダンス学部では、クラシックバレエ、モダンダンス、ジャズダンス、Hip Hop、タップダンス、アフリカダンスなどの多様なダンスのほか、ヨガやピラティスなどの授業もある。また実技系の授業だけでなく、舞踊学や舞踊歴史学等の学問系の授業も充実している。また講師陣も教育者としてだけでなく、現役のパフォーマーとして活躍している方が多く、学生たちからの信頼と尊敬

を集めていた。

UARTSにはダンス学部の他に、音楽学部、美術学部がある。年に2～3回、学生発表の場としてコンサートがあり、各学部が連携してコンサート運営をしている。普段の練習の成果を、舞台上で発表する機会が多いせいか、学生たちが授業に取り組む姿勢も非常に真摯だった。

滞在中、私も様々なクラスに学生として参加し、各講師がどのように指導しているのか研究させてもらった。その中でも特に印象深かった2つのクラスについて以下に記す。

1-1. ジャズダンスのクラス

参加したのは1年生のジャズダンスのクラスで、毎回20名ほどの学生が受講していた。授業内容は、①ストレッチ ②ラインでのコンビネーション ③フロアでのコンビネーションの3部構成だった。

まずストレッチでは、曲に合わせて毎回決められた振付でストレッチをしていた。印象的だったのは、「今どこの筋肉をストレッチしているのか」「どこの筋肉とどこの筋肉が連動して動いているのか」を、講師が細かく説明している点だった。これは、以後のラインやコンビネーションでも折に触れて話していた。

ラインでのコンビネーションでは、スタジオの端から端まで、ステップやジャンプを組み合わせて、何度も往復する。同じコンビネーションを繰り返すことで、個人の苦手な部分が明確になり、その弱点を克服するための方法を、講師が一人一人丁寧にアドバイスしていた。フロアでのコンビネーションは、全員鏡に向かい同じ振り付けを練習する。ここでも、細かい筋肉の使い方を、講師は詳細に伝えていた。

このジャズダンスのクラスに参加して気がついたことは、講師が「プロ」のダンサーを育てることにいかに腐心しているか、ということだった。毎回の授業では、振付のパターンに大きな変化はなかった。しかし、回を追うごとに講師からの注意は細部に渡るようになり、特に筋肉の動かし方の連動について何度も言及していた。

この理由について、担当講師に話を聞いたところ、体を故障させずに、息の

長いダンサーとして活動していくためには、筋肉の動きを熟知し、自在にコントロールできるようにならないといけないからだということだった。また、講師は授業中に「きちんとした朝食をとるように」「栄養バランスを考えた食事をするように」といった、食事についての言及も毎回していた。これも、プロのダンサーとして体を作っていくために、必要不可欠なことだからということだった。また食事等の生活についての言及は、1年生に特に意識的に行なっているとのことだった。これは大学生活の初年度に、基本的な生活スタイルを身につけてもらいたいからとのことだった。

1-2. アフリカダンスのクラス

参加したクラスは、1・2年生合同のクラスだった。このクラスの構成は、①ストレッチ ②ライン ③グループごとの振付で、構成されていた。また、毎回プロのアフリカンドラム奏者がクラスに参加し、生演奏にあわせて踊っていた。

ストレッチについては、前述のジャズダンスを始めとする西洋舞踊のクラスでは毎回同じ振付で行なっていたが、アフリカダンスのクラスではBGMを流して、各自が思い思いにストレッチをしていた。ラインでは、アフリカダンスの基本的なステップを中心に、スタジオの端から端まで、何度も繰り返してステップを踏んでいた。アフリカダンスのステップは、主に動物の動きを元にしていくものが多いようで、一つ一つのステップの意味を講師が説明しながらクラスを進行していたのが印象的だった。

グループごとの振付では、3～4人で一グループになり、まずストーリーを作った上で、基本ステップを組み込みながら、自分たちで振付・構成を考えていった。クラスの最後には、その日の成果を各グループごとに発表し、お互いに講評し合うことで、次週のクラスへの課題としていた。

このクラスで特に印象強かったことは、講師がアフリカダンスの動きを説明する際、頻繁にバレエなどの西洋舞踊と比較していたことだった。また、将来プロのアフリカダンサーになる人は少ないが、このクラスで得た経験やインスピレーションを、プロとなった際の創作等に活かして欲しいというメッセージを、よく口にしていたことも印象強かった。

1-3. UARTS授業の特徴

どのクラスに参加しても、一貫して講師陣は「プロを育てる」という意識で、学生たちに接していた。この大学が芸術大学であるから、当たり前といえば当たり前なのだが、プロとして活動するための基本である生活にまで言及した指導に、私は講師陣たちの「本気度」を感じた。そして「体を壊さない踊り方」についても、講師の体感だけではなく、解剖学や運動生理学に基づいた指導をしているため、一つ一つの言葉に説得力があった。琉球舞踊の踊り手の中には、腰や膝を痛める人が少なくないが、この点については、私自身も非常に多くのことを学び、また考えさせられたし、今後の課題を与えてもらったと感じている。

またアフリカダンスなどの民族舞踊では、動きの元になったモノ・コトを入り口にして、踊りの技術・歴史だけでなく、ダンスが生まれた歴史的・文化的背景にまで言及していたのが印象的だった。加えて夏休み期間を利用して、地域と連携した小学生向けの学習体験イベントなどを企画し、そこにUARTSの学生をスタッフとして参加させていた。学生に学んだことの成果を発揮させる場をつくり、また地域社会へも還元していくというサイクルを生み出す仕組みを作っていることも、非常に勉強になった。この点についても、私自身の今後の課題として、得たものは非常に大きかった。

2、ワークショップでの指導方法：UARTS授業にて

2006年2月～3月にかけて、UARTSの授業内にて、琉球舞踊のワークショップを計7回行った。参加人数は、毎回15名～多い時で40名ほど。持ち時間は60～90分間であった。与えられた授業枠内容は、舞踊学のような学問系の授業から、実技の授業まで、様々だった。

このワークショップの対象はUARTSの学生であるが、琉球舞踊についてはもちろん、「沖繩」について全く知らない(興味が無い)学生がほとんどであった。参加した学生たちは、自ら興味をもってワークショップに参加しているのではなく、授業の一環としていわば強制的に「参加させられている」という状況であった。このような状況だったので、授業中、いかに学生の興味を引き出

し、持続させるか、が私自身の大きな課題だった。

ワークショップの目的は、①琉球舞踊の歴史・特徴について知る ②琉球舞踊の動きを体験する、の2点を主な目的とし、最終的には4月下旬の「Spring Dance」コンサートでの琉舞パフォーマンスメンバーを募集することも視野にいれた。

以上の目的から、ワークショップの主な内容は、①沖縄の概略 ②琉球舞踊の特性 ③琉舞の体験(または実演)の3点に絞り構成した。

(表1) ワークショップ構成と時間配分

	内 容	実技系科目 時間配分	学問系科目 時間配分
導入	自己紹介と、授業内容の紹介	約 5 分	約 5 分
①沖縄の概略	地理的、歴史的説明	約 10 分	約 15 分
②琉球舞踊の特性	歴史、踊りの種類、技法の特徴、衣裳の特徴など	約 15 分	約 30 分
③琉舞の体験	実技系授業枠の場合は「琉舞体験」 学問系授業枠の場合は「実演鑑賞」	約 30 ～ 40 分	約 15 分
質疑応答	質疑応答 (時間があれば)	約 10 分～	約 10 分～
締め	スプリングコンサート出演者募集について締めの挨拶		

上記の基本を踏まえて、ワークショップの行われる場(スタジオか講義室か)、ワークショップが組み込まれた授業の内容と目的(実技系科目か、または学問系科目かなど)を考慮して、内容・構成・時間配分を微調整しつつ行った。

2-1. ワークショップ内容：「導入」

ワークショップが実際に始まる前は、導入部分の重要性について、あまり意識していなかった。なので漠然と、「自己紹介をする」とだけ考えていた。しかし初回のワークショップ終了後、学生に「なぜ東京出身のあなたが、わざわざ沖縄に住んでまで琉球舞踊をしているのか、そこを聞きたい」と質問され、学生が興味を持っている部分の一端を知ることができた。

そこで初回以降、導入部分の自己紹介で、私自身のパーソナルストーリーを

織り込みながら、「なぜ私が琉舞に魅了されたのか」について伝え、参加している学生にも、琉舞の魅力を少しでも知ってもらいたいということを、簡潔に伝えた。

冒頭で「私自身の話し」をすることの効果は、予想以上に大きかったと感じた。まず第1に「自分の話し」なので、話しているうちに、強い感情が自分の中に沸き起こる。その結果、言葉だけでは伝えきれない、私自身の琉舞への愛情・情熱が、ボディークワークや表情などで表現できていたように感じる。

第2に、学生のワークショップへの取り組み方・積極性が高まったように感じた。この理由は、教える人のパーソナルストーリーと意見を聞くことで、私との距離感が縮まり、私個人への興味が増すことで、それが琉球舞踊への興味につながっていくのではないだろうか。

生身の人間が伝える以上、伝える側の人間に、相手がどれだけ共感し、興味を持ってくれるかは、琉舞を広め、理解してもらうためには、とても重要な要素なのだと感じた。

2-2. ワークショップ内容：①沖繩の概略

ここでは、沖繩の地理的・歴史的な説明をした。初回のワークショップでは、すべて口頭で行ったが、学生たちによりわかりやすく伝えるために、2回目以降は地図を持参し、沖繩の場所を指し示しながら説明した。地図をみながら説明することで、日本本土・中国・東南アジアとの関係も、より具体的なイメージをもって、理解してもらえたように感じた。加えて気候などについて視覚的に理解してもらうため、写真を持参し、見せながら講義をした。

内容については、事実をただ羅列するのではなく、「なぜ琉球舞踊の特徴が形成されたのか」という着地点を見据えた話の展開を、毎回試行錯誤した。これにより、ワークショップ全体の流れに筋が通り、スムーズになったと感じた。

2-3. ワークショップ内容：②琉球舞踊の特性

ここでは琉球舞踊の歴史、踊りの種類、技法の特徴、衣裳の特徴などを説明した。表1のとおり、実技系科目内では時間配分を短めにして、このあとに続く「琉舞の体験」の前準備として位置づけた。一方、学問系科目内では、主要

な内容と位置づけ、時間も長くとった。

琉球舞踊の種類については、ワークショップ開始当初は写真をみせて説明していた。しかし、より明確に理解してもらえるように、後半はDVDで実際の踊りをみせながら説明した。映像の見せ方・使い方についてはいろいろ試行錯誤したが、最終的には、映像を流しっぱなしにするのではなく、まずは演目の種類・意味・特徴の概略を簡単に説明した後、演目の特徴的な動きを1分ほどピックアップして見せ、その上で、学生たちにぜひ理解してもらいたいポイントについて、再度伝えるという方法が、一番伝わりやすいようであった。

種類についてひと通り鑑賞・説明を終えた後に、琉球舞踊の特徴的な技法「すり足(足裏を床から離さずに歩く歩き方)」「こねり手(手首を旋回させて、手の平の向きを変える動き)」「アテ(腕から手先を瞬間的に止める技法)」などにクローズアップして説明した。ここでは、私が動いて見せるだけではなく、学生たちにも可能な限り一緒に動いてもらった。実際に学生が自ら体を動かすことで、理解が深まると考えたからだ。加えて一方的に話を聞くという受け身の体制から、自分で体を動かすことで、少しでも学生の積極性を引き出したいという狙いもあった。

このように実際に学生たちに動いてもらいながら、技法が生まれた背景を説明した。ここでも、事実を羅列して説明するのではなく、前述の「沖縄の地理的な説明」を踏まえて、沖縄周辺の国々からの影響、さらに西洋と東洋の舞踊の違いについてもふれ、他地域の舞踊と琉球舞踊の比較を交えながら説明した。ここで特筆すべきことは、他の地域・国からの影響や比較について、学生たちの反応がすごくよかったことだった。多くの学生が興味深そうに、集中して話を聞いていたのが印象的だった。

衣裳については特徴と成立した背景、着付けの仕方などについて説明した。私は毎回クンジの着物(琉球藍で染めた緋模様の着物)を、ウシンチー(帯を使わず、腰紐一本で着る着物の着方)にして、ワークショップを行っていた。これは、私がクンジを実際に着ることで、衣裳・着付けの特徴や、沖縄の織物についても説明しやすく、また学生たちも身近に感じてもらえるのではないかと考えたからだ。しかし、やっていくうちに、私が着ているのを見て触ってもらうだけではなく、学生たちに実際に着てもらった方が、より興味を持っても

らえるのではないかと感じた。そこで、紺と紅型の衣裳を別途準備し、学生をモデルにして、着付けをしながら衣裳の説明をした。こちら学生たちの興味と興奮を引き出し、集中してもらうには、とても良い方法だった。学生たちは積極的に衣裳を着たがった。また衣裳を着たまま、次の「琉舞の体験」もしてもらったので、動きが着物で制限され、琉舞の技法についてより理解が深まったようだった。

2-4. ワークショップ内容：③琉舞の体験／実演鑑賞

実技系科目内でのワークショップでは、学生たちに実際に琉球舞踊を踊ってもらうことに重きをおいた。一方学問系科目内のワークショップでは、私が実演をし、学生たちに鑑賞してもらった。

琉球舞踊を実際に踊ってもらう「体験」の構成は、①下半身の動き ②上半身の動き ③演目の通しの、3部で構成した。まず「①下半身の動き」では、琉球舞踊の様々な歩みを行った。主に古典舞踊で使う「すり足」、雑踊りの歩み、アヒルアッチー(足を軽く外側に蹴りながら歩く技法)などである。ここでは参加者全員でフロアに大きな円を作り、ぐるぐる周りながら、様々な歩みをした。加えて片足立ちでの一回転やヘンバイ(片足ずつ床を打つ技法)なども行った。

「②の上半身の動き」は、主に「こねり手」を中心に体験してもらった。女役と男役でのこねり手の違いをまずは説明し、片手、両手、縦の動き、横の動きなどを実際に動いて体験してもらった。

最後に、一つの演目をピックアップして、その演目で一番特徴のある動きを、音楽に合わせて皆で踊った。選択した演目は、ワークショップ開始当初は「浜千鳥」をしていた。こねり手が多く使われている演目なので、琉球舞踊の特徴を知ってもらうには、いい演目だったと思う。しかし、曲調が少し寂しいこともあり、「琉球舞踊」の面白さを若い学生に伝えるには、時間が短すぎると感じた。

そこで、コンサートでやる演目候補の一つだった「まみどーま」に、後半から切り替えた。この演目は、単純な動きを繰り返すので、動きを覚えるのに時間がかからないこと。また、生活の中からうまれた具象的な動きを元に振付されているので、振りの意味がわかりやすいこと。曲調が明るく、テンポが早い

ので、学生が楽しんで踊れるというメリットがあった。

一方、学問系授業内では、私が実際に琉球舞踊を踊ってみせた。ここでは「浜千鳥」を踊った。理由は、前述のとおりこねり手が多く使われているので、琉球舞踊の特徴を知ってもらうには、ちょうどいいと考えたからだ。

また琉球舞踊の基本の動き、例えば「歩み」「こねり手」などでも、演目によって表現が微妙に違うことを、比較しながら説明した。この際実感したことは、私自身が説明したことを、実演で「体現できるか」が最も重要だということだった。いくら言葉で説明しても、実際の踊りで表現できなければ説得力がない。「指導法の研究」とともに、私自身が実演家として力をつけていかなければならないことを、このワークショップで再確認した。

2-5. まとめ

以上、UARTSの学生を対象にしたワークショップについて、具体的に述べた。ワークショップの構成や内容は、毎回の反省や学生たちの反応を、次の授業に即活かすという、試行錯誤の連続だった。ここで学んだことは、まず第1に「視覚にうったえる」ことの重要性だった。沖縄の地理や気候についていくら言葉をつくしても、それはあくまでも情報であって、学生たちの脳裏に具体的なイメージは湧いてこないようだった。イメージが湧いてこない、興味すら湧いてこない、集中力が続かない。沖縄の海や街、生活の様子などを写真でみせたり、琉球舞踊の様々な映像を見せることは、具体的なイメージを持ってもらうにはとても効果的だと感じた。

次に「実際に動いてもらう」ことの効果だった。これは学生たちを、「話を聞くだけ」という受動的な状態から、積極的な参加へと変えていくのに、非常に効果が大きいと感じた。また実際に動いてもらう際に大切なのは、「動きの意味」を伝えるということだった。単純に見本を示し、真似してもらうだけでは、学生たちは何をやらされているのか理解出来ない。これでは、学生たちの興味と集中は(ただでさえ強制的にワークショップに参加させられているのに)、薄れるばかりだと感じた。

加えて、琉球舞踊を他地域・国の舞踊と比較して伝えた際の、学生たちの反応の良さは、非常に多くのことを私に教えてくれた。このことは、沖縄側=内

側からの視点だけでなく、外側=沖縄以外の地域・国から琉球舞踊がどう捉えられて、あるいは見られているのかを、まずは私自身が理解した上で、伝え・教える重要性を示唆していると思う。沖縄側から見えるものだけを言葉にすると、伝える側の自己満足で終る危険性があること。また琉球舞踊を、非常に限定的で狭い視野で捉えることになるので、non-Okinawanに琉舞の魅力を「実感を伴って」理解してもらうことが難しくなると感じた。留学期間中の早い段階でこのことを学べたのは、私にとってとても幸運だったし、以後の滞在中の研究に、非常に大きく影響した。

3. UARTS舞台公演に向けての指導方法

UARTSでのワークショップ中盤以降、10名の学生が学内コンサート「Spring Dance」の琉球舞踊に出演を希望してくれた(内訳はアメリカ人8名・日本人留学生2名／男性5名、女性5名)。本番まで2ヶ月間もなく、しかも練習は基本的には週2回、間にSpring Breakも入ったので、テクニカルリハーサルまで、わずか19回の稽古となった。

短い期間で、いかに効果的に稽古をするか。その方法を見い出すために、集まってくれた学生の個性や、強みと弱みを探りながら稽古を進めた。UARTSの学生の最大の武器は、まず第1に、身体スキルがとても高いことだった。身体スキルが低いと、こちらの注意を「頭で理解」できても、実際に「体を動かす」ところまでいかない。学生たちは注意した部分を、すぐに動かし修正することができた。第2に振り付けを覚えるのが早いということ。様々なダンスを経験している学生たちなので、動きを理解し、体現する能力は非常に高かった。

一方で「腰を落とす」という、琉球舞踊の最大の特徴を維持して踊ることが苦手だった。以上の点を踏まえて、演目の決定と、本番までの稽古スケジュールおよび稽古方法を考えた。

3-1. 演目の決定

コンサートのために集まってくれた学生の顔ぶれをみて演目を決めるということは、渡米前から決めていた。なぜなら、学生の個性を見た上で、各個人の魅力を最大限に引き出すことが、短い稽古期間でいい舞台をつくりだす最善の

方法だと考えたからだ。もちろん、現地で演目を決めるリスクはある。衣裳や小道具の手配をどうするか、また音源の調整など、不安材料をあげたらきりが無いが、これは渡米前の準備や協力依頼、また現地調達でなんとかなると判断した。

メンバーが決まる前、UARTS到着直後のダンス学部長との打ち合わせで、「なるべく早いテンポの楽しい演目を」という要望があった。なのでワークショップでの学生たちの反応を参考にしながら、雑踊りあるいは創作作品を中心に、いくつか上演演目をピックアップし、絞っていった。とはいえ、ワークショップをやっていく中で、やはり古典舞踊の魅力を少しでも学生たちに知ってもらいたいとも強く感じた。

集まった学生たちは、非常に個性豊かなメンバーだった。その魅力を最大限に引き出すために、なおかつ琉舞の多様性が観客にわかるように、という観点から演目を選定し、全体の構成を考えた。メインとなる演目は「まみどーま」にしたが、①古典の要素をいれる、②学生たち(出演者および観客の大半)の集中を維持する(稽古期間および本番)、以上の2点を考慮して、前後に神女の祈りと、収穫・祭りのシーンをいれてストーリー性を持たせ、再構成・振り付けした。具体的な使用曲目等は、以下表-2のとおりである。

(表2) Spring Danceコンサート「まみどーま」の構成及び使用曲目

	内容	出演人数	使用曲目	動きの要素	振付等
1部	神女の祈り	1人	雨乞いの歌	古典舞踊	再構成・振付
2部	田作り	9人	まみどーま	民俗舞踊・雑踊り	再構成
	種まき	2人	まみどーま	民俗舞踊・雑踊り	再構成・振付
	収穫	10人	稲しり節	民俗舞踊・雑踊り	再構成・振付
3部	豊年のまつり	10人	クイチャー	民俗舞踊・雑踊り	振付・構成

3-2. 稽古スケジュールと稽古方法(前半)

コンサート練習の最初の2週間は、雑踊りの基本の歩みと、「まみどーま」の基本の動き(テーマ)の練習に費やした。この期間は、琉球舞踊の特徴である「腰

を落とす」、そしてこの状態を「維持して踊ることを習得する」を、主な目的とした。通常、琉舞の稽古では、師匠の後についてひたすら踊ることが多い。この方法は、長い時間をかけて、動きを体に染み込ませるには、有効な方法だと考える。しかし、今回のように短期間で踊りを仕上げるには、有効な方法とは思えなかった。

そこで、UARTS講師陣の授業構成、①ストレッチ ②ライン ③フロアの3部構成を参考に、稽古方法を考えた。その内容は①ライン ②フロア ③振りうつしの、3部構成である。はじめの2週間は、①ライン ②フロアの練習がメインとなった。



(写真1)「まみどーま」ラインでの練習
(上半身を固定し、下半身だけを動かす練習)

①ラインでの練習は、まずスタジオの端から端まで、直線で移動しながら動くのに適した動きを、演目の中から抽出することが必要だった。ここでは、まみどーまの「歩み」「ヘラの動き」「カマの動き」「鍬の動き」を、音楽にあわせて行った。ただ闇雲に、全身の動きを数多くこなすのではなく、上半身を固定して、下半身だけを動かすといった、「動きの分解」も行った。この練習方法は、琉球舞踊で使う下半身の筋肉を鍛えるのに、とても有効だったようだ。その一方、上半身と下半身の連動や、もっと細かい部位の筋肉の連動、あるいは動きの意味を、言葉で説明しながら練習を進めた。この稽古方法は、私にとっても、琉舞の動きを様々な角度から検証するいい機会となった。

②フロアでの練習は、ラインで抽出した動きよりも、さらに大きなまとまりのあるパートを抽出して練習した。ここでは鏡に向かって、全員で同じ動きを

繰り返し練習した。学生たちは、振付を覚えるのは非常に早かったが、琉球舞踊の型(腰の保ち方、体・腕・脚の向きなど)を覚え、体現することはなかなか難しいようだった。そこで、琉舞の型について、クラシックバレエの基本の型に置き換えて、あるいは違いを比較して説明した。

学生たちが取得している西洋舞踊のルールに、琉球舞踊のルールを当てはめたり、あるいは西洋舞踊のルールに当てはまらない部分を、琉球舞踊の特徴として伝えることは、学生たちの理解の一助となったようで、学生のみならず私自身も強い手応えを感じた。



(写真2)「まみどーま」フロアでの練習

また、フロアで踊る時間以外も、琉球舞踊について学ぶ大事な時間として捉えた。稽古開始前後の挨拶(正座での挨拶)や、立ち居振る舞い等も、琉球舞踊のルールにのっとっておこなった。これはコンサート本番まで一貫しておこなったが、琉球舞踊を育んだ生活習慣や文化を学ぶ上で、とても大きな効果があったと感じた。

3-3. 稽古スケジュールと稽古方法(後半)

前半の稽古期間中、学生たちの個性を探りながら、「神女の祈り」「種まき」「収穫」「豊年のまつり」部分の振付や構成を考えた。また本番まで学生たちのモチベーションを維持するために、主要パートの配役をオーディションで決めた。オーディションは「神女(女性1人)」と「種まき(男女各1人)」の部分について、計2回行った。オーディション制にしたことで、学生たちは高い集中力を維持し、稽古中盤の気の緩みを引き締めることができた。またオーディションに落

選した学生たちの意気を上げるために、群舞中に各人が活躍し、スポットが当たるとような、配置・構成も心がけた。

稽古期間後半の最大の課題は、「腰を落とした状態を維持すること」「動きを全員で揃えること」の2点だった。「腰を落とした状態を維持すること」については、「なぜ腰を落とすのか？」といった理由や、「腰を落とす」という体の使い方がうまれた文化的背景にまで言及して、繰り返し説明した。

腰を落として踊ることが課題になるであろうことは、私自身ある程度予想していたが、予想外に苦戦したのが「動きを全員で揃える」ことだった。琉球舞踊の群舞は、動きの角度やタイミングを全員揃えることが基本であり、だからこそ「息のあった」踊りとなり、魅力につながる。しかしこのことを学生たちにいくら伝えても、またこの演目が、共同体全員で力を合せて農作物を作り、収穫する踊りだということをいくら説明しても、全く動きが揃わなかった。

理由や内容をいくら説明しても動きが揃わない原因について、学生たちを観察しつつ考察したところ、ここにも西洋舞踊との大きな違いがあることに思いいたった。彼らは、群舞でいかに「自分が目立つか」ということに腐心していた。そのため、わざとタイミングをずらしたり、角度を微妙に変えることで、個性をだそうとしていたのだった。

彼らの舞踊の価値観として、これはこれで非常に大事な事なので、これを否定せずに、琉球舞踊の価値観を理解してもらうために、どのようにアプローチしていくか、非常に頭を悩ませた。UARTSの講師陣たちの教え方も参考にしながら、ここでもやはり、西洋舞踊のルール・価値観から、琉球舞踊を捉えて共通点を見出し、それを言語化することを試みた。なぜクラシックバレエでは繰り返し型を体に叩きこむのか。それは個人の体の癖を取り除き、いわば癖のない「ゼロの体」をつくりだすためであること。それでもどうしても体からにじみ出てくる何かがあり、これが「本当の個性」であるとクラシックバレエの大家たちが語っていること。琉球舞踊も同じで、全員が同じ型で踊っても、それでもにじみ出る個性があること。小手先だけのいわば「取り繕った個性」は、かえって踊りが下手に見えること、などの話を、一度稽古を中断して、じっくり話す機会を作った。

この話に参加した学生たちは深く納得したようで、以後私が驚くほど、動きが揃うよ

うになった。また動きが揃うようになったと同時に、もう一つの課題であった「腰を落とした状態を維持する」についても克服できたことは、私自身非常に驚き、また感動した。コンサート本番で学生たちの踊りを見た日系人が「こんなに腰を落として踊れるアメリカ人は、いままで見たことがない」と言ってくれたことは、稽古中の試行錯誤と、学生たちの努力が実を結んだ結果だと思う。



(写真3)「まみどーま」

(Spring Danceコンサート本番を終えて学生たちと)

加えて、踊りにより深みを増すため、「チームの結束力」を高めることも、意識的に試みた。コンサートの演目は、「共同体全員で力を合せて農作物を作り、収穫する踊り」だと、言葉をつくして説明したところで、頭で理解できても実感が伴わない。そこで、学生たちに、小道具の製作を手伝ってもらったり、日本食パーティーを催すなど、稽古時間以外に皆で集まる機会を折に触れて作った。メンバーと一緒に過ごす時間を増やすことで、仲間意識が強まり、それが踊りにも反映したと感じた。また衣裳の着方・たたみ方を練習する時間を設け、衣裳の管理を自分たちでさせた。学生たちはコンサート本番までには、全員着付けを自分でできるようになっており、このことは琉球舞踊を踊ることへの、自信と誇りにつながったと思う。

4、県系3世への指導方法

2006年5月～7月は、米国滞在中に知り合った県系2世(Nさん)と3世(Mさん)の方へ、琉球舞踊を教えた。演目は、古典舞踊の「かぎやで風」「四つ竹」(Nさん、Mさん)と、雑踊り「加那よー」(Mさん)。稽古は、私もしくは彼女たちの自

宅で行った。Nさんたちの仕事や学校の合間をぬって、平均週2回の稽古をし、最終的にNさんたちの自宅で、プライベートコンサートを開催し、成果を発表した。

4-1. 稽古方法

お二人とUARTSの学生との大きな違いは、普段から踊りをしている方たちではないので、振付を覚えるのに、時間がかかったということだった。Mさんは、大学のサークル活動でエイサーをしていたこともあるため多少の素養はあったが、Nさんは特に振付を覚えることに苦勞していた。稽古は基本的に、私の後について二人が踊るといふ、一般的な琉球舞踊の稽古の仕方を踏襲したが、それでも動きを言語化し言葉で説明するという点において、試行錯誤を繰り返した。ここでは、UARTSの学生に教えた経験が非常に役に立った。琉球舞踊の振付の法則や、角度の決まり事を、その成立した背景にまで言及して、一つ一つ説明しながら稽古をすすめた。加えて歌詞の意味も説明し、振付の意図や表現内容も説明した。

また鏡がなかったので、二人が自分の形を確認することが難しいようだった。そこで二人の形を私が再現することで、どこが間違っているのかを視覚的に理解してもらった。その上で、私自身が正しい動きをやってみせて、修正していった。修正の際には、目に見える体の表面的な違いだけでなく、目に見えない体の中(筋肉や骨格)をどう動かすのか、ということも言葉で伝えたり、あるいは実際に私の体に触れてもらったりして、違いを示していった。

稽古後半は、実際に衣裳をきて稽古をした。着るものによって動きが抑制されるので、腕を上げる位置や、脚の開きなども、自ずと限界がでてくる。これによって、正しい型を、いわば強制的に体に覚えさせることができると感じた。

4-2. 成果発表の場を設定する効果

お二人とも非常に意欲的に稽古に取り組んでいたが、それでも稽古中盤からモチベーションが下がっているように感じた。せっかく稽古をしているのに、ダラダラと続けるだけではもったいないと感じたので、Nさんたちとその家族に、プライベートコンサートを開催し、関係者に稽古の成果を披露したらどう

かと提案した。家族にも非常に喜んでいただき、と同時に、お二人の稽古での集中力もぐっと増した。また化粧や着付けも自分でできるように練習した。

ここで感じたのは、地道な稽古もちろん大事だが、自分たちの努力の成果を、自他ともに確認する場が、いかに大事であるかということだった。目標を設定することで、稽古の質が格段にあがり、短い稽古期間でも、大きな成果を残せると感じた。またお二人にとっても、実際に化粧、結髪、着付をして、人前で踊る経験をすることで、琉球舞踊への愛着がより一層増すのだとも感じた。



(写真4) プライベートコンサート本番を終えて

プライベートコンサートには、お二人の親戚や県系人が沢山来てくれた。普段沖縄の伝統文化に触れる機会が少なく、また興味もさほどない若い人や子どもたちにとって、身近な人が本場の琉球舞踊を踊るのを間近で見る経験は貴重だったようだ。次の世代の人たちへ、沖縄の文化を継承していきたいと願っている県系人にとっても、また私自身にとっても、大きな学びを得た。

終わりに

以上、半年間の研究をまとめた。琉球舞踊の魅力を世界の人達に知ってもらうためには、琉球舞踊の海外公演をするという方法もあるが、それだけではないアプローチの仕方もあるのだということ、今回身を持って経験した。滞在前半、UARTSのワークショップで「スプリングコンサートで琉舞を踊りたい！」と、学生たちに思ってもらうにはどうしたらいいかを、一貫して考え、伝え方を思考錯誤したが、そこで学んだことは「実感を伴った理解」をいかに引き出すかということだった。そのためにも、琉球舞踊について言語化する、

しかも、沖縄(=内側)からの視点だけではなく、世界(=外側)からの視点で、琉球舞踊を考察して言語化することの重要性を学んだ。このことは、県外出身者であり、また様々な舞踊を踊ってきた私の強みとして、今後の活動に活かせる可能性を、私自身に示してくれた。と同時に、自分が言葉で伝えたことに説得力を持たせるためには、琉球舞踊の実演家として、私自身が力をつけていくことも必要不可欠だということを再確認した。

最後に、米国滞在中に沖縄でサポートしてくれた先生方と仲間・家族、そして様々な局面で手を差し伸べ、支えてくださったアメリカ沖縄県人会の方々、今回貴重な機会を与えてくださった沖縄県国際交流・人材育成財団のみなさまに、心から感謝いたします。

活動実績

- ・2006年2月23日(木) 13:00~14:20 ワークショップ(UARTS 授業)
- ・2006年3月14日(火) 14:30~16:00 ワークショップ(UARTS 授業)
- ・2006年3月27日(月) 8:30~ 9:50 ワークショップ(UARTS 授業)
- ・2006年3月28日(火) 8:30~ 9:50 ワークショップ(UARTS 授業)
- ・2006年3月29日(水) 14:30~15:50 ワークショップ(UARTS 授業)
- ・2006年3月30日(木) 11:30~12:30 ワークショップ(UARTS 授業)
- ・2006年3月30日(木) 14:30~15:30 ワークショップ(UARTS 授業)
- ・2006年4月 3日(月) 12:00~14:00 実演(フィラデルフィア桜まつり/於: Liberty Place Rotunda / 演目: 加那よー)
- ・2006年4月 9日(日) 11:30~16:00 実演(フィラデルフィア桜まつり/於: Fairmount Park / 演目: かぎやで風)
- ・2006年4月27日(木) 19:00~ UARTS学生コンサート(指導)(Spring Dance/於: Merriam Theater / 演目: まみどーま)
- ・2006年4月28日(金) 9:00~ UARTS学生コンサート(指導)(Spring Dance/於: Merriam Theater / 演目: まみどーま)
- ・2006年5月13日(土) 実演・講演(University of Pennsylvania/演目: かせかけ)
- ・2006年5月14日(日) 実演(NY県人会新春会/演目: ぜい)
- ・2006年5月27日(土) 実演(シカゴ県人会40周年記念/演目: 鳩間節)
- ・2006年7月15日(土) 企画・指導(プライベートコンサート/演目: 四つ竹・加那よ)

メディア掲載記録

- ・雑誌「からから」19号 平成19年7月11日発行 (内容: NY県人会での琉舞稽古風景)
- ・2006年7月15日(土) 沖縄タイムス 夕刊 3面 (内容: UARTSコンサートについて)
- ・2006年7月22日(土) 沖縄タイムス 夕刊 3面 (内容: シカゴ県人会での演舞について)

(こじま たかな)